The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「クビライ遺訓」小考
Author(s)	松井, 太
Citation	内陸アジア言語の研究. 2022, 37, p. 121-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91332
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

内陸アジア言語の研究 37, 2022.11, 121–134

「クビライ遺訓」小考

松井　太*

1. はじめに

トルコ共和国イスタンブル大学図書館に所蔵されるペルシア語写本『驚異の雑纂（*Maǧmaʿ al-ʿAǧāʾib*）』の 1 葉は，15 世紀ティムール朝治下の中央アジアにおそらく由来するパクパ文字モンゴル語・ウイグル文字テュルク語の合璧テキストを含む(1)．この合璧テキストの内容が，モンゴル帝国第 5 代皇帝クビライ（d. 1294）が逝去に際して子孫に帝国経営の心構えを説いた「遺訓」であることは，O. N. Tuna と J. Bosson の共著論文により明らかにされた［Tuna/Bosson 1962］．Tuna/Bosson によるモンゴル文・テュルク文の検討は周到であり，彼らのモンゴル文校訂案は各種のパクパ文字モンゴル語文献の資料集でもおおむね踏襲されているが(2)，モンゴル文には一部に未詳・不詳の語彙が残されていた．それらの諸点を，当該葉の美麗なカラー写真［図 1 参照］を示しつつ再検討したのが，M. Ölmez と A. Vovin の共著論文である［Ölmez/Vovin 2018］．この「クビライ遺訓」の校訂テキストとそこに内包される諸問題は，Tuna/Bosson と Ölmez/Vovin の文献学的検討により，ほぼ明確化されているといえる．

これと並行して，「クビライ遺訓」に関説する日本人研究者の論著としては，まず筆者がその内容を「英主クビライの「遺訓」がパスパ字モンゴル語で記録されて各地のモンゴル政権に届けられ，後代にまで伝承され」たものと簡介し［松井 2001, 37］，その後に村岡倫が Tuna/ Bosson の英訳に依拠したパクパ文字モンゴル文の抄訳を示した［村岡 2006, 151–152］．さらに最近，宮紀子は，パクパ文字モンゴル文の全訳を提出し，従来不明とされてきた末尾部分にティムールの孫ピール=ムハンマド（Pīr Muḥammad）の名を読み取ったうえで，このモンゴル文を大元ウルス官撰の「パクパ字モンゴル語版『歴代制詔』（1324 年刊）もしくは『世祖聖訓』（1326 年刊）からの抜粋」とみなすことを提案した(3)．しかし，いずれも専門的な学術論文の形式をとるものではな

---

* 大阪大学大学院人文学研究科教授（Matsui Dai. Professor, Graduate School of Humanities, Osaka University）

(1) Anonym, *Maǧmaʿ al-ʿAǧāʾib*, MS., İstanbul Üniversitesi Merkez Kütüphanesi, F.1423, fol. 61a.

(2) Ligeti 1972, 123; 照那斯圖 1991, 216–219; Төмөртогоо 2002a, 66–67, 169; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 514–516; Sertkaya 2006; Tumurtogoo 2010, 115–116; Tömörtogoo 2022, 115–116. Cf. Sertkaya 1977, 6．なお Ölmez/Vovin 2018 によれば，Жанчив 2002, 144 にもこの「クビライ遺訓」が提示されている（筆者未見）．

(3) 宮 2021, 41–43．ここで宮のいう『歴代制詔』は，『元史』巻 29・泰定帝本紀一・泰定元年（1324）正月甲辰条にみえる『列聖制詔』の誤か．この『列聖制詔』・『世祖聖訓』は宮の旧稿でも言及されているが［宮 2006, 239–240, 265, 438; 宮 2008, 122 ＝宮 2018 上, 427］，そこでは「クビライ遺訓」との関係は指摘されていなかった．ちなみに筆者は，宮 2021 に先んじて，この「クビライ遺訓」が『世祖聖訓』に由来する可能性を 2010 年 8 月に公開講演で指摘し（「内陸アジア出土資料からみたモンゴル時代のユーラシア交流」，大阪大学歴史教育研究会大会「阪大史学の挑戦 2 」2010 年 8 月 10 日，大阪大学中之島センター），

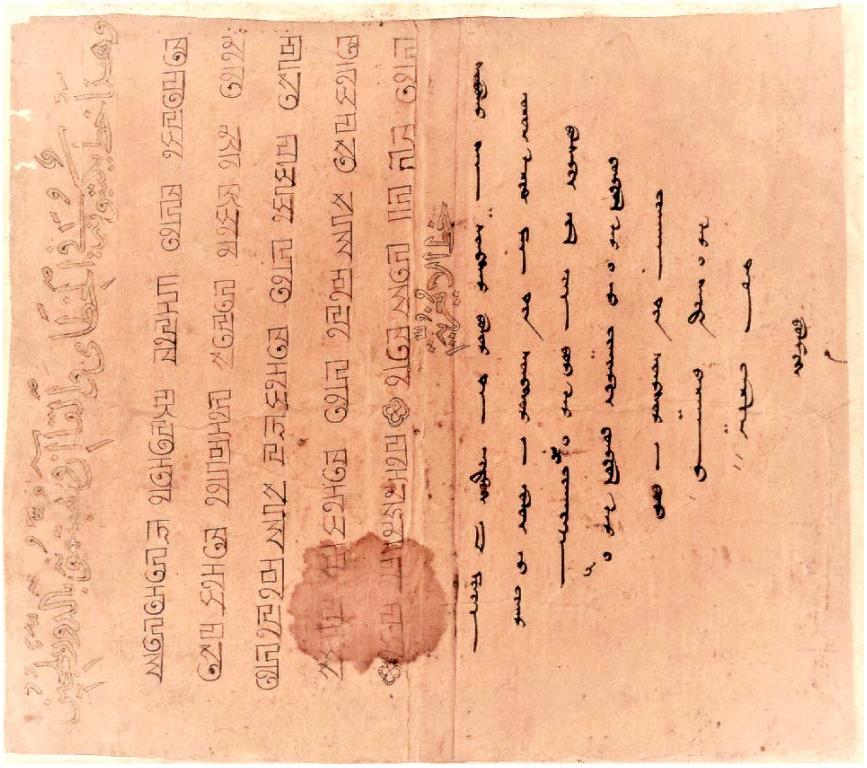

図１　『驚異の雑纂』所収「クビライ遺訓」［from Ölmez/Vovin 2018, 153］

いため，Tuna/Bosson 1962 と Ölmez/Vovin 2018 により指摘されたパクパ文字モンゴル文に関する文献学的な諸問題は俎上には載せられず，またウイグル文字テュルク文の内容についてはほとんど

その講演用ハンドアウトは科研費報告書に収録されていくつかの研究機関や個人に頒布されている（大阪大学歴史教育研究会編『最新の研究成果にもとづく大学教養課程用世界史教科書の作成』JSPS 科研費（No. 23242034）報告書，2014, 82–85）．ところで，筆者はこの講演で，ラシードゥッディーンの『珍貴の書（*Tanksūq nāma*）』とウイグル語訳『千字文』の翻訳スタイルの共通性について羽田亨一・庄垣内正弘らの研究に依拠して言及し，『珍貴の書』の漢字音体系とウイグル字音の相違を説明する便宜から，『珍貴の書』写本見開きのカラー画像データと，その当該葉とは異なる箇所のテキストを“例”（すなわち，図版に示された写本当該葉の記載内容を説明する「キャプション」ではない）として，講演用ハンドアウトの「クビライ遺訓」・『世祖聖訓』関係の記述と同じ頁に提示したことがある．宮は最近の文章で筆者の scholarship について言及し，「松井太は……『珍貴の書』の写真を示す際，キャプションに対応しない別の頁を掲げた」と批判している［宮紀子「モンゴル時代史研究を志す人のために」志茂碩敏・志茂智子『モンゴル帝国史研究完編』東京大学出版会, 2021, 840］．刊行されている筆者の学術的著作において『珍貴の書』の図版とテキストを同時に掲載したものは上述の講演用ハンドアウト以外に存在しないので，宮の指摘はこの講演用ハンドアウトを対象とするものと思われる．上述したような講演当日の筆者の説明や意図が宮に十分に理解されなかったのは遺憾であるが，聴講者や読者の誤解を招く内容であったことは否めないので，その批判を甘受したい．あわせて，正式に文章化されていない講演・口頭報告や学会・研究会の配付資料・ハンドアウト類の内容を扱う際には，賛同・批判いずれにせよプライオリティに細心の注意を払うべきであり，ましてやアイデアの盗用や剽窃は決して許されないという，宮の年来の主張［e.g., 宮 2006, 672; 宮 2020, 134］にもあらためて賛意を表明するものである．

注意されていない．一方，このモンゴル文の筆者をティムール朝王族に同定し，さらにテキストの内容を大元ウルス官撰のモンゴル語書籍に由来するものとする宮の新提案は，必然的にモンゴル文・テュルク文の相互関係や写本として成書される過程，ひいてはティムール朝支配層が有していたモンゴル語文化とパクパ文字・ウイグル文字文化の理解に関わる．これらの諸点は，Tuna/Bosson から Ölmez/Vovin に至るまでの「クビライ遺訓」の文献学的研究でも，必ずしも十分に検討されてはいなかった［本稿第 3 節参照］.

そこで本稿では，まず「クビライ遺訓」のパクパ文字モンゴル文・ウイグル文字テュルク文の両テキストについて，現在までに蓄積されているモンゴル時代のモンゴル語・ウイグル語文献や中央アジア以西発現の多言語対訳資料に関する知見をふまえ，また Ölmez/Vovin が提供したカラー写真も参照しつつ，いまいちど文献学的に検討する．さらに，そこから導かれる未解明語彙の修正案に基づき，「クビライ遺訓」の淵源やモンゴル文・テュルク文テキストの対訳・成書過程に関しても若干の考証を試みる.

2. テキスト・訳・語註

パクパ字モンゴル文のローマ字翻字・転写は Ligeti 1972 の方式におおむね従う．ただし，文字表記されない母音 a は翻字に示さない．これに逐語的な日本語訳を添え，また村岡 2006・宮 2021 の両訳も並行させて参考に供する．ウイグル文字テュルク文については Tuna/Bosson と Ölmez/Vovin によりほぼ正確に校訂されているので，翻字は省略して転写と日本語訳のみ示す.

（1）テキスト・訳

M1	翻字	qu-bu-l-yi	q･-nu	ǰ-r-liq	bo-lu-run	t	･u-ru-･utʿ
	転写	qubulayi	qa’anu	ǰarliq	bolurun	ṯa	’uru’ut
	松井	クブライ=	カアンが	おおせに	なるには	「汝ら，	子孫たち
	村岡	クビライ・	カアンが	仰せに	なるには	「おまえたち，	我が子孫たちよ．
	宮	クブライ・	カアンが	聖旨(ジャルリク)を	のたまうに	「汝ら，	我が子孫たちよ，

M2	翻字	mi-nu	mo-n	qo-yi-n	･u-lus	･ir-gä-ni	qu-ri-y-b-su
	転写	minu	mona	qoyina	’ulus	’irgeni	quriyabasu
	松井	(←私の)よ，	この	後，	くに	たみを	集めるなら，
	村岡		今	後，	くに	たみを	集めようとするなら，
	宮		久しき	後も	国(くに)	民(たみ)を	束ねたければ，

M3	翻字	gä-su	bė-yä-yi ･-nu	qu-ri-y-t-l	sätʿ-gi-li ･-nu
	転写	gesü	bėyeyi ’anu	quriyatala	setgili ’anu
	松井	と言うならば，	身体を(←彼らの)	集める前に，	心を(←彼らの)
	村岡		人々の肉体を	集めるまでに，	必ず彼らの心を
	宮	よいか (＝我は言おうぞ)，	かれらの身を	捉えることに拘らず	かれらの心を

M4	翻字	qu-ri-y-b-su	sätʿ-gi-li ･-nu	qu-ri-y-čʿ	bä-y-s
	転写	quriyabasu	setgili ’anu	quriyača	beyạs
	松井	集めれば,	心を(←彼らの)	集めた後には,	身体は
	村岡	集めておけ.	彼らの心を	集めておけば,	きっと彼らの肉体は
	宮	掴むなら,	かれらの心を	掴んでしまえば,	かれらの体は

M5	翻字	･-nu	q･-･ä	･utʿ-qun	✤ bir m-h-m-d	bi-b-yi ✤
	転写	’anu	qa’a-’e	’utqun	bir mahamad	bi[či]bạyi
	松井	(←彼らの)	どこへ	去るだろうか」.	ピール=ムハンマド	が書いた.
	村岡		どこにでも	ついてくるだろう」.	【後　略】	
	宮		何処に	営(いとな)めるものか」.	ピールムハンマド	が写した.

T1 qubulay xan šungqar bolur-ta ayṭmïš ay mening
クブライ=ハンは鷹になる時におおせられた.「ああ, 我が

T2 uruγ-larïm män-tin songγur-a uluṣ-nï yïγar
子孫たちよ！私(の死)から後, くにを集める

T3 bolsangïz el-ning boy-lar-ï-nï yïγγïnča
のであれば(←汝らが), 人々の身体を集める前に

T4 kọnggül-lär-i-ni yïγïngïz kọnggül-lär-i-ni
心（←彼らの）を集めよ！心（←彼らの）を

T5 yïγγan-tïn songγur-a boy-
集めてから後, 身体

T6 -lar-ï qayda barγay
(←彼らの)はどこへ去るだろうか」

T7 täp yarlïγ
と, おおせに

T8 bolmïš
なった.

（2）語注

M1, qubulayi qa’an ǰarliq bolurun = T1, qubulay xan šungqar bolur-ta ayṭmïš : T. šungqar bol-「鷹（šungqar ~ šïngqur）になる」は君主の逝去を示す表現であり［Tuna/Bosson 1962, 14］,『バーブル=ナーマ』にも類例がみえる［ED, 838; 間野 1998, 20］. このテュルク文は, クビライの逝去を直截に述べないモンゴル文と厳密には対応しない.

クビライ（M. Qubilai > P. Qūbīlāy）の名を qubulay と表記する例は, やはりティムール朝時代に属する通称『バイスングル=アルバム（Baysungur Album)』所収のウイグル文字テュルク語のモン

ゴル・ティムール朝系譜にも確認される(4).

モンゴル帝国における最高君主（皇帝）の称号としての qa’an ~ qaγan (> P. qān ~ qā’ān) と一般君主としての qan ~ T. xan (> P. ḫān) との峻別は周知の通り［cf. 松井 2021, 103］．本処のパクパ文の表記 q･n = qa’an は大元ウルス治下のパクパ文字資料と一致する一方，ウイグル文字は X’X’N = xaγan (~ M. qaγan) ではなく X’N = xan (~ qan) と判読せざるを得ない．『五族譜（*Šuʿab-i Panǧgāna*）』のウイグル文字モンゴル語表記はオゴデイ以降の皇帝（P. qān）をおおむね Q’’N ~ Q’’’N = qaan ~ qa’an (~ qaγan)，一般君主を Q’N = qan (~ T. X’N = xan > P. ḫān) として区別しているように見受けられ，モンケとクビライを Q’N = qan と称したり，逆にフレグを Q’’’N = qa’an とする例［ŠP, fol. 129b, 138b］が意図的なものか単なる誤記かは定めがたい．一方，前述の『バイスングル=アルバム』所収系譜はクビライ（Qubulay）を T. xan (= M. qan) と称し，その他のペルシア語史料で ḫān と称されるモンゴル王族と区別しない(5).

M2, mona qoyina = T2, män-tin songγur-a: M. qoyina = T. songγur-a (~ songra < song)「後」の直接的対応は *Muqaddimat al-Adab*, *Rasūlid Hexaglot* などの対訳資料から確認される：MA/Poppe, 311, M. qoyina (قوينه) = T. sonqra (سونقرا); cf. RH, 315, M. qoyina (قوينا) = T. song (سنك) “after, behind.”

『元朝秘史』は mona qoyina > 抹納 中豁亦納を「久後」と傍訳しており，宮の訳語「久しき後も」はこの傍訳に依拠したものであろう．この mona qoyina は『秘史』や華夷訳語にみえる mono (~ mönö) qoyina > 抹那 中豁亦納＝久後／明後と同一表現であり［MNT/Rachewiltz I, 390］，小澤は『秘史』の抹納 < mona を抹訥 < mönö (~ mono) の誤記とみたが［小澤 1987, 224］，本処のパクパ文字表記は，西寧王ヒンドゥ（忻都 < Hindu）碑・張応瑞碑およびサイフッディーン=オテミシュ（Sayf al-Dīn Ötemiš）題記のウイグル文字表記とともに M. mona (~ mön-a) を在証する［Cleaves 1949, 116; Cleaves 1950, 117; Cleaves 1953, 485］．既知の在証例では，M. mona は常に qoyina と熟して用いられており，Төмөртогоо・Ölmez/Vovin は “this, the same one” という語釈を提案している［Төмөртогоо 2010, 187; Ölmez/Vovin 2018, 149］．

M2–3, ’ulus ’irgeni quriyabasu gesü = T2–3, uluṣ-nï yïγar bolsangïz : M. ulus irgen が「国民，くにたみ」と熟して用いる例は『元朝秘史』［01:44:10; 05:01:05; 05:19:03; 12:49:02; 12:55:06; 12:55:08］や韃靼館来文［2:02a1; 2:18a5; 2:19a3; 2:24a4］．にも散見する［村上 1970, 131–134］．本処テュルク文の ’WLWZ = uluṣ (~ ulus)「ひとびと；くに」はウイグル文字モンゴル語の正書法に従っている．

---

(4) MS., Topkapı Saray Müzesi Kütüphanesi, Hazine 2152, fol. 36a; Sertkaya 1981, 255.

(5) この系譜資料で xan (~ qan) 号を与えられているのは，①カイドゥ（qaydu xan），②カブル（qabul xan），③チンギス（činggiz xan），④チャガタイ（čaγaṭay xan），⑤トルイ（toluy xan），⑥クビライ（qubulay xan），⑦アリク=ブケ（arïγ bökä xan），⑧フレグ（ṵlä’ü xan），⑨テムル（tämür xan），⑩アフマド（axmaḍ xan），⑪キカトゥ（käyqaṭuu xan），⑫アルグン（arγun xan），⑬ガザン（γaẓan xan），⑭ハルバンダ（＝オルジェイトゥ，xarbanda xan），⑮アブー=サイード（busa’iḍ xan）の 15 名である［cf. Sertkaya 1981］．ただし⑨テムルは，ウイグル文で「フレグの息子たち（ṵlä’ü oγlan-lar-ï）」の一人であることが注記されるものの，歴代フレグ=ウルス当主（qan ~ xan ~ ḫān）に同名人物を見出せない．おそらく第 3 代当主テグデル（T’KWD’R = tägüdär）の名を T’MWR = tämür と誤記し，さらに彼が即位後に用いたムスリム名アフマド（AP. Aḥmad > axmaḍ）が別人の後継君主の名と誤解されて⑩に記録されたのであろう．

M. ulus「くに，ひとびと」は居庸関碑文小字パクパ文字モンゴル文では ʿu-lus = ulus と綴られており［Ligeti 1972, 85, 88, 90; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, §§39$_{1}$, 40$_{3,9}$］，本処の綴り ʿu-lus = ʼulus とは異なる．一方，M. irge(n)「たみ，人民」は，本処と同じ ʿir-gän = ʼirgen という表記が大元ウルス治下のパクパ文字文献でも一般的に用いられる(6).

M. v. quriya- = T. v. yïγ-「集める，収める」の対応関係も *Muqaddimat al-Adab* から明瞭である：MA/Poppe, 311, M. quriyaba irgeni (قوريابه ايركانى) = T. yïγdï elni (ييغدى ايلنى)「人民を収拾した」．『華夷訳語』の漢語との対訳例も，おおむねこれを支持する： M. quriya- = Chin. 收拾 ; T. yïγïp (< yïγ-) = Chin. 收［HYYY/Beijing, 42, 103］.

モンゴル文語の副動詞仮定形 -basu/-besü はパクパ文字文献では一般に -ʼasu/-ʼesu と表記され［Tuna/Bosson 1962, 9; Ölmez/Vovin 2018, 148］，明らかに大元ウルス治下の中華地域で印刷されたトゥルファン出土パクパ文字モンゴル語仏典『善説宝蔵論（サキャ格言）』も，v. quriya- の仮定形を qu-ri-yʿ-su = quriyaʼasu とする［照那斯圖 1991, 200–201; Tumurtogoo 2010, 100; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 482］．本処のパクパ文字表記 qu-ri-y-b-su = quriyabasu「集めるならば」は，ウイグル文字表記の QWRYYʾBʾSW = quriyabasu に一致する(7).

テュルク文の「集めること（yïγar）になれば（bolsangïz）」という自然な表現に対して，モンゴル文の quriyabasu「集めるならば」に後続する gä-su = gesü の解釈は定まっていない．Tuna/Bosson はこの gesü を v. ge- (~ geʼe-)「言う」の仮定形 geʼeʼesü の異形と解釈しつつ，本処の文脈では “grammatical abomination” とみなした［Tuna/Bosson 1962, 10］．一方，Ölmez/Vovin は gesü を T. el「人々；くに」に対訳される語とみなし，M. ger「家」から派生した gersün を「くに，国家」の意で用いるべきところを誤記したものと想定したが［Ölmez/Vovin 2018, 149］，gersün「家」の語の具体的な在証例が示されておらず，にわかに従えない．宮の「よいか（＝我は言おうぞ）」という訳語は，おそらく v. ge-「言う」の voluntative (-sü) という解釈に基づくのであろうが，モンゴル文の文脈や並行テュルク文との比較からは，このような表現が挿入される必然性を見出せない．

筆者は，Tuna/Bosson に従って本処の gesü を v. ge-「言う」の仮定形とみなし，先行の quriyabasu「集めるならば」を主題として強調する表現と考えておきたい．『元朝秘史』（§147, 04:50:04–05）にも，kē’esü「言えば（< v. kē-）」が副動詞 bürün (< v. bü-) に後続して主題を強調する用法を確認できる：ene bürün kē’esü munda alaqsan-iyan dayyisurqaqsan-iyan ülü buča[n] = 這箇 呵 說呵 却 殺了的 自的行 反做了的自的行 不隱諱「こやつは（ene bürün），と言えば（kē’esü），却って自らが殺したこと・敵対したことを憚らずに」［小澤 1986, 178］．至正二十八年（1368）順帝トゴンテムル聖旨の $_{21}$ʿi-nu säd-kʿil-dur kʿʿe-su = inu sedkil-dür ke’esü「彼（＝プトン bu ston > M. bosdon）の心にある

(6) 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, §§3$_{7}$, 34$_{5}$, 14$_{8}$, 31$_{5}$, 20$_{3}$, 28$_{13,18}$, 29$_{9,13}$, 37$_{7}$, 19$_{7,9}$; B163:77 (DMBS III, pl. 85-3) = Tumurtogoo 2010, No. 47$_{2}$.

(7) ただし『善説宝蔵論』トゥルファン出土刊本には bü-tʿu-ʿä-b[ ] = bütü’eb[esü]「全うすれば (~ M. bütügebesü < v. bütüge-)」というパクパ文字表記もみえ［Bosson 1961, 94; BT XVI, 73］，文語形の -besü が突発的に -bä-su = -besu とパクパ文字表記され得たことが示唆される．

通りに，と言うならば」［照那斯圖 1991, 108; 呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 339; Tumurtogoo 2010, 93–97］も類例とみなし得よう．

M3, bė̇ye-yi ’anu quriyatala = T3, boy-lar-ï-nï yïγγïnča :「彼らの身体を集める前に」．「身体」をさす M. beye (بيه ~ بيا) = T. boy (بوى ~ بويى) の対応は *Rasūlid Hexaglot*・*Muqaddimat al-Adab* にも見出される［RH 204; MA/Poppe, 311;］．

本処の bė-yä = beye，および第 2 音節の ä = e 字を缺く $_{M4}$bä-y-s = beyạs (~ M. beyes (pl.) < beye) という表記は，居庸関碑文東壁小字パクパ文字モンゴル文の bä-yä = beye とは異なる［呼格吉勒圖・薩如拉 2004, 426; Ölmez/Vovin 2018, 148］．また，本処を含め 4 箇所で用いられる後置代名詞 anu はすべて・-nu = ’anu と綴られ，大元ウルスのパクパ文字資料で一般的な ”a-nu = anu とは異なる．

M3–M4, setgili ’anu quriyabasu = T4, kọnggül-lär-i-ni yïγïngïz : setgili ~ M. sedkil = T. kọnggül ~ köngül「心」の対応にも問題は無い［e.g., MA/Poppe, 312–313, 321, 392］．

本処ではモンゴル文の動詞 quriya-「集める」が「集めれば（quriyabasu < v. quriya-）」という仮定形副動詞をとるのに対して，テュルク文では二人称命令形 yïγïngïz (< v. yïγ-)「（汝らは）集めよ」が用いられ，厳密には対応しない．村岡が本処のモンゴル文を「集めておけ」と訳したのは原義から乖離するが，クビライの「遺訓」としての全体の文脈にはテュルク文が相応するという判断に基づくと思われ，その判断自体は支持できる．テュルク文に並行するモンゴル文としては二人称命令形の quriyaγtun ~ quriyadqun のような形式が期待されるが，本処のパクパ文字をそのように判読することはできない．

M4, quriyača = T5, yïγγan-tïn songγur-a : テュルク文の「集めたこと（yïγγan）から後には；集めた後には」に対して，モンゴル文の quriyača の語解は定めがたい．パクパ文字 qu-ri-y-čʿ = quriyača の綴りは明瞭であり，Төмөртогоо の quriyaqu-ča という解釈は根拠を缺く(8)．Ölmez/Vovin は quriyača を v. quriya- に deverbal noun の -ča が後続した “gathering” の意と解釈したが，並行テュルク文の yïγγan-tïn「集めたことから」が奪格 -tïn を含むことに鑑みれば，v. quriya- に deverbal noun の -γa，さらに奪格の -ača が後続した M. quriyaγa-ača「集めたことから；集めてから（後に）」に関連させた Tuna/Bosson の旧案が説得的に思われる．

M5a, qa’a-’e ’utqun = T6, qayda barγay : テュルク文が「どこに去るだろうか」と自然に理解されるのに対し．モンゴル文に対する従来の解釈は混乱している．Tuna/Bosson は q・・ä-・utʿ-qun = qa e’ütqun と判読し，qa を「どこ」，e’üdqün を M. egüdkün < v. egüd- “to erect, to undertake, to found” の異形と解釈して “What will their bodies (alone) undertake?” と英訳した［Tuna/Bosson 1962, 11］，Ölmez/Vovin もこれをおおむね踏襲し，本処のモンゴル文を “where will their bodies stand?” と英訳

(8) Төмөртогоо 2002a, 66．なお Tumurtogoo 2010, Tömörtogoo 2022 では，本処の quriyača は後続の bä-y-s = beyạs を併せて qu-ri-y-[ba]-s[u] = quriyabasu「集めるならば」と修正されたが［Tumurtogoo 2010, 115–116; Tömörtogoo 2022, 116］，写本の当該箇所の綴字に鑑みれば支持できない．Tumurtogoo 2010 および Tömörtogoo 2022 の語彙集では旧案の quriyaqu-ča も残されているので，Төмөртогоо 自身の最終的な解釈は不明である．

する［Ölmez/Vovin 2018, 149］．宮の「どこに営(いとな)めるものか」という訳語も，おそらく Tuna/Bosson, Ölmez/Vovin と同様の解釈に基づくものであろう．

しかし，つとに Tuna/Bosson 自身が注意したように，v. e'üd- ~ egüd- という女性語の動詞語幹に -qun という男性語の形動詞複数形を後続させるという解釈には文法的に無理がある．モンゴル文自体の文脈からも，本処の q･･ä･utʿqun というパクパ文字表記には，テュルク文の qayda barγay「どこに去るだろうか」と同義のモンゴル文が期待される．その点では，おそらくモンゴル文の文脈とテュルク文の解釈から演繹した村岡の「どこにでもついてくるだろう」という訳に，それなりの妥当性を見出すことができる．

敦煌石窟題記銘文などの用例からは，ウイグル語・テュルク語の v. bar-「行く；去る；出発する」に並行するモンゴル語としては v. od-「行く，去る」を想定できる［松井 2017, 23, 89; 松井 2018b, 38］．いわゆるイスタンブル語彙（*Šāmil al-luġā*）も，T. varïr mïsïn「君は行く (varïr ~ barïr < v. bar-) か？」に M. odumu či「君は行く（か）」を対応させる［Ligeti 1962, 59; Kaçalin 1997, 68］．また Ölmez/Vovin も指摘するように，･ä と ･utʿ-qun とは意図的に大きな間隔をとって記されているので，･ä･utʿqun を 1 語とみなす必要はない．そこで筆者は，･utʿ-qun を 1 語とみなして 'utqun と転写し，これを M. v. od-「行く，去る」の形動詞複数形 odqun の誤記と解釈する(9)．さらに，この誤記の要因に，本文書パクパ文字モンゴル文の原文もしくは親写本がウイグル文字で表記されていたことを想定したい．M. odqun はウイグル文字では ʾWTQWN と表記されるが，ウイグル文字の ʾW- 自体は /o-/, /u-/ の別を明示しないので，モンゴル語に通暁しない者によって /utqun/ ~ /udqun/ と誤読・誤解され，パクパ文字で 'utqun と表記されることは十分にあり得る．

この 'utqun (< odqun) の直前の ･ä = 'e は単独では意味をなさないので，先行の q･ に後続させて q･-･ä = qa'a-'e という形式を読み取ることとなる．これが『元朝秘史』･『華夷訳語』にみえる qa'a「どこ」(> 哈阿～中合阿＝那裏；中合＝那）［栗林 2009, 353; 栗林 2003, 68–69］の異形であれば，T. qayda「どこに」に対応させられる．この qa'a のウイグル文字形式は未在証ながら，Qʾ-ʾ = qa-a のような表記が想定される．上述したように，本文書のモンゴル文がウイグル文字表記の原文に由来するとすれば，*Qʾ-ʾ というウイグル文字表記がパクパ文字で q･･ä = qa'a-'e と置換されることも不可能ではないと思われる．男性母音（後舌母音）の /a/ がパクパ文字 ä (= e) で表記される例は，敦煌石窟のパクパ文字ウイグル語題記銘文にも確認される［Kara 1976, 56; 松井 2017, 40］．

ただしモンゴル文語には QʾNʾ = qana ~ QʾN-ʾ = qan-a「どこに」という形式もあり［Lessing, 927］，これが 14 世紀に遡ることは，いわゆるイブン=ムハンナー（Ibn al-Muhannā）語彙の qanā (قنا) や *Rasūlid Hexaglot* の qānā (قانا) などのアラビア文字音写形式から確認できる［Меліоранскій 1904, 144; RH, 315; Төмөртогоо 2002b, 113］．周知の通り，ウイグル文字の aleph と加点の無い N とは判読困難であるから，本処のパクパ文字 q･-･e = qa'a-'e は，あるいはウイグル文字表記 QʾNʾ ~ QʾN-ʾ の第 3 字の N が aleph と誤読されたことを反映するのかもしれない．

---

(9) トゥルファン出土のパクパ文字モンゴル語『善説宝蔵論（サキャ格言）』断片には v. od- のパクパ文字表記 'o-d[...] = od[umui] が在証される［BT XVI, 66］．

M5b, bir mahamad bi[či]bạyi : この文末のパクパ文字 12 字は四つ葉状の紋様に挟まれており，Tuna/Bosson 以来の bi r m h m d bi b yi という判読案は，Ölmez/Vovin が新たに公刊したカラー写真からも支持される［図 1 参照］.

Tuna/Bosson はこれを bi ram hamd(a) bi bayi と転写し，冒頭の bi を一人称代名詞「私」，文末の bi-b-yi を bi[či]bei「書いた」の誤記または略筆とみて，“I Ramhamd(?) wrote it” と訳出した．これに対し，Ölmez/Vovin は冒頭の 7 字を bi-r-m h-m-d = birma ḥamd < A.-P. farmān ḥamd “praiseworthy edict” と解釈した．しかし，この 7 字は，宮の新案に従い，bir m-h-m-d = bir mahamad と転写してムスリム人名ピール=ムハンマド (Pīr Muḥammad) のパクパ文字表記とみなすべきである(10).

文末の bi-b-yi を M. bičibei「書いた」の誤記とみなす Tuna/Bosson の解釈については，この表記が大元ウルスのパクパ文字資料で一般的な bi-čʿi-bäẹ = bičibeị (~ M. bičibei) とは異なり，母音字 ä ( ) = e を含まない点が留意される．ただし，本処の bi-b-yi を b[ol]bai (< v. bol-)「～があった；～が成った」の誤記と解釈した Ölmez/Vovin も英訳では “[I] wrote down” とするように，文脈に鑑みれば Tuna/Bosson 案が妥当に思われ，bi[či]bạyi という転写を提案しておく.

3.「クビライ遺訓」の成書過程をめぐる諸問題

本節では，「クビライ遺訓」モンゴル文・テュルク文のテキスト情報をもとに，その成書過程や「原典」・淵源などの問題について，若干の考証を提示しておきたい.

Tuna/Bosson や照那斯圖がつとに注意し［Tuna/Bosson 1962, 9; 照那斯圖 1991, 216］，また上掲語註の諸処で指摘したように，「クビライ遺訓」のパクパ文字モンゴル文の書記法は，大元ウルス治下の一般的なパクパ文字モンゴル語文献とは異なる．最も特徴的な相違は語頭母音の表記方法である．大元ウルスのパクパ文字モンゴル語文献では，語頭の母音はおおむね以下のように表記される： ”a ( ) = a ; ”ä ( ) = e ; ʿe ( ) = ė ; ʿi ( ) = i ; ʿo ( ) = o ; ʿu ( ) = u ; ”ö ( ) = ö ; ”ü ( ) = ü．これに対し，「クビライ遺訓」は ’a-chung 字 (・=) 字単独で語頭の a を示し（$_{M3,4,5}$・-nu = ’anu ~ M. anu），それ以外の語頭母音は $_{M1}$・uru・utʿ = ’uru’ut (~ M. uruγud), $_{M2}$・u-lus = ’ulus (~ ulus), $_{M2}$・ir-gä-n = ’irgen (~ irgen), $_{M5}$・utʿ-qun = ’utqun (< odqun) にみられるように，’a-chung 字に語中形の母音字を後続させて示す：・e ( ) = ’e ; ・i ( ) = ’i ; ・u ( ) = ’u(11).

Ölmez/Vovin は，この ’a-chung 字による母音の表記法がアラビア文字の ’ālif (ا) 字の用法に影響されたものと推測した［Ölmez/Vovin 2018, 148］．しかし周知の通り，ウイグル文字表記のテュルク語・モンゴル語でも単語の語頭母音には必ず aleph 字が冠されるので，この ’a-chung 字の用法

---

(10) 人名要素の Pīr をウイグル文字で BYR = bir と表記した例はアルダビール文書に確認される［Doerfer 1975, 218］．A.-P. Muḥammad についてはウイグル文字モンゴル語表記 MQMT = m(a)γm(a)d ~ MʾQMʾT = maγmad, etc. も在証されているが［PTMD, 593–594］，本処のパクパ文字表記 m-h-m-d は，むしろアラビア文字表記 Muḥammad = MḤMD (محمد) の反映であろう.

(11) ただし，大元ウルス治下のパクパ文字モンゴル語文献にも，母音字に ’a-chung 字を冠する用法は散発的にみられる：・i-h・ä-n = ’ih’en (~ ihên ~ M. ibegen) ; ・ir-gä-n = ’irgen (~ irgen) ; ・eu-gä = ’üge (~ üge)［Tumurtogoo 2010, 153; 栗林・松川 2016, 89; 上掲語註 M2–3 参照］.

はウイグル文字表記における aleph 字の反映とも考えられる．実際，ドイツ隊将来のトゥルファン出土パクパ文字・ウイグル文字対照表断片（MongHT 095）も，パクパ文字の ’a-chung 字 (・=) にウイグル文字 aleph を対応させており［BT XVI, 196, Nr. 95］,「クビライ遺訓」の ’a-chung 字がウイグル文字 aleph の用法に即することを傍証する．「クビライ遺訓」の $_{M5}$・utʿ-qun = ’utqun はウイグル文字で表記された原文・親写本の odqun (< v. od-) を誤読したものとみなすことで文脈およびテュルク文と整合的に解釈されるが［語註 M5a 参照］，特殊な語頭母音の表記方法も，ウイグル文字表記の原文・親写本の存在を示唆するものといえる(12).

さて照那斯圖は，「クビライ遺訓」の例外的なパクパ文字表記法に着目しつつ，その成書過程について「（クビライ遺訓を）書写した人物はパクパ文字正書法に習熟しない者，おそらくはパクパ文字を知るウイグル人であり，モンゴル人から民間に流伝していた皇帝クビライの聖旨を記録し，かつ原文をウイグル文に翻訳したと考えられる．あるいは，その原文はパクパ文字正書法に習熟しないモンゴル人に由来するもので，それを別のウイグル人が翻訳したのかもしれない」と推測した(13)．しかし，前述のトゥルファン出土パクパ文字・ウイグル文字対照表断片の語頭母音のパクパ文字表記は大元ウルス治下で通行していた正書法に従っており（”a = a ; ʿi = i ; ʿu = u ; ʿe = ė ; ʿo = o）［BT XVI, 196, Nr. 95］，これを筆写したウイグル人が大元ウルスのパクパ文字正書法に習熟していたことが示唆される(14)．1348/1360 年チャガタイ=ウルス当主トゥグルクテムル発行命令文書（MongHT 071）の朱方印のパクパ文字ウイグル語印文の ʿo-ron = oron「御位，玉座」［Ramstedt 1909, 845; Franke 1962, 407–408; BT XVI, 176］や，楡林窟第 3 窟北壁のパクパ文字ウイグル語題記の ʿed-kʿu = edkü (~ Uig. ädgü)「善い」，ʿid = id (~ Uig. ït)「犬，戌」などの例［cf. 松井 2017, 69］も，大元ウルスのパクパ文字正書法がモンゴル時代のトゥルファン・敦煌地域のウイグル人に周知されていたことを傍証する．これらを勘案すると，「クビライ遺訓」パクパ文字モンゴル文が，モンゴル時代にウイグル人によって用意されたとは考え難い．

上述したように，宮紀子は，「クビライ遺訓」パクパ文字モンゴル文末尾にピール=ムハンマド（$_{M5}$bir mahamad < Pīr Muḥammad）という人名を読み取って同名のティムールの孫――長子ウマル=シャイフの子もしくは次子ジャハーンギールの子のいずれか―― に比定し，彼をパクパ文字モンゴル文の筆者とみなした上で，チンギス制定の『大法令の書（yāsā nāma-yi buzurg）』とともにティム

---

(12) この点を敷延すれば，「クビライ遺訓」の $_{M4}$quriyača も，quriyaγa-ača ~ quriyaγa’ača というウイグル文字表記の誤読に基づくものとも考えられる．ウイグル文字草書体では -aγa = -ʾQʾ は直線的に書かれるので，モンゴル語に通じない読者・書記によって単一の aleph = /a/ のように誤解・誤読された可能性はある．また，文末の $_{M5}$bi-b-yi = bibayi ([sic!] < bičibei ?) に母音字 -ä- が含まれないことについても［語註 M5b 参照］，M. bičibei のウイグル文字表記 BYČYBʾY からは男性語・女性語を特定できないことが留意される．

(13) 照那斯圖 1991, 216「它的書寫人可能不是熟悉八思巴字正字法的人，而很可能是一位得八思巴字的回鶻人，他從蒙古人那裏記錄了在民間流轉的所謂忽必烈皇帝的聖旨，并對原文作了回鶻文的翻譯．也許還有一個可能,即原文出自不熟悉八思巴字正字法的蒙古人，而別有回鶻人對它作了翻譯」.

(14) 松川節は，この文字対照表に使用されるウイグル文字の cheth に尻尾の長短による区別がみられることに基づき，その作成者・使用者を西ウイグル時代以来のウイグル文字正書法に通じたウイグル人と推定している［松川 1995, 111–112］.

ール朝王族のあいだで帝王学の教材とされた大元ウルス官撰のパクパ文字モンゴル語版『列聖制詔』や『世祖聖訓』から本「クビライ遺訓」が抜粋されたと想定した［宮 2021, 41–43］．宮のこの想定は確証できないものの，一定の蓋然性を認められる．『驚異の雑纂』には「ティムール駙馬の子シャールフの子イブラーヒーム=スルターン（Ibrahīm Sulṭān bin Šāhruḫ ibn Tīmūr kūrkān）」に言及する別葉（fol. 13b）が収められており［Tuna/Bosson 1962, 6–7］，またティムールに仕えたイブン=アラブシャー（Ibn ʿArabšāh）も「キタイ（al-Ḫaṭā）」由来の「ドルベルジン（A. dulbarǧīn [sic!] < dūrbalǧīn < M. dörbelǰin）」文字すなわちパクパ文字がティムール朝で使用されていたことを伝えているからである［cf. AM/Sanders, 321］．

とはいえ，上述したような例外的なパクパ文字の表記法や $_{M5}$･utʿ-qun = ’utqun (< odqun) の誤記［語註 M5a 参照］に鑑みれば，「クビライ遺訓」のモンゴル文がたとえ『列聖制詔』や『世祖聖訓』に淵源するとしても，それは大元ウルス官撰のパクパ文字モンゴル語文献からの抜粋ではあり得ず，直接にはウイグル文字モンゴル文のテキストを原本・親写本としてパクパ文字に翻字したものとみなすべきである(15)．念のため，『列聖制詔』・『世祖聖訓』ともパクパ文字を使用していたことは史料上では明言されず(16)，また『列聖制詔』と同時に刊刻・頒布された『大元通制』についてはウイグル文字モンゴル語刊本の存在が確認されているから［牛根ほか 2021］，『列聖制詔』や『世祖聖訓』のウイグル文字モンゴル語版も存在した可能性が高い．ウイグル文字はチンギスの大法令（ǰasaγ ~ T. yasa(q) > P. yāsā(q)）を記録した文字としての権威と結びついてティムール朝でも汎用され，やはりイブン=アラブシャーによれば，ティムール朝治下にはウイグル文字表記の年代記（tawārīḫ）・頌詩（ašʿār）・伝記（qaṣaṣ）や「チンギス=カンの慣習法（al-tūrā al-Ǧinkīz ḫān）」が存在していたという［cf. AM/Sanders, 321–322; Shahgoli 2017, 162; 松井 2018a, 15–18］．これら諸種のウイグル文字文献のなかに，大元ウルスからチャガタイ=ウルスに送達されさらにティムール朝にまで伝存した『列聖制詔』・『世祖聖訓』のウイグル文字モンゴル語版や，それに淵源するか類似の内容をもつ書籍が含まれていたかもしれない．

ところで，現存の「クビライ遺訓」のパクパ文字モンゴル文・ウイグル文字テュルク文の関係について，諸先学はみな前者から後者が訳出されたと考えてきた［Tuna/Bosson 1962, 3; 照那斯圖 1991, 216; 村岡 2006, 151; Ölmez/Vovin 2018, 147, 149; 宮 2021, 41］．しかし，これは多分に，写本における記載順序とモンゴル語を母語とする皇帝クビライの「遺訓」という内容から，アプリオリに想定されてきたものにすぎない．実際には，「クビライ遺訓」のウイグル文字テュルク文が文脈から自然に理解できる構文をとるのに対し，パクパ文字モンゴル文には $_{M3}$gesü, $_{M4}$quriyabasu,

---

(15) その点では，「クビライ遺訓」を「英主クビライの「遺訓」がパスパ字モンゴル語で記録されて各地のモンゴル政権に届けられ，後代にまで伝承され」たものとみなした拙稿の簡介［松井 2001, 37, 傍点筆者］も修正を要する．

(16) 『元史』巻 29・泰定帝本紀一・泰定元年（1324）正月「甲辰，敕譯『列聖制詔』及『大元通制』，刊本賜百官」；同巻 30・泰定帝本紀二・泰定三年（1326）七月「乙卯，詔翰林侍講學士阿魯威・直學士燕赤譯『世祖聖訓』，以備經筵進講」；同・泰定四年（1327）七月「戊戌，遣翰林侍讀學士阿魯威還大都，譯『世祖聖訓』」．Cf. 宮 2006, 239–240, 265, 438; 宮 2008, 122 ＝宮 2018 上, 427.

M4quriyača など文脈に照らしていささか不自然な表現や構文・形式が散見する［語註 M2–3, M3–4, M4 参照］．この点に鑑みると，「クビライ遺訓」のウイグル文字テュルク文は，並記されるパクパ文字モンゴル文から訳出されたものではなく，これとは別に存在した，「遺訓」として自然な表現・文脈をもつ――おそらくウイグル文字表記の――モンゴル語原典に由来すると推測される(17)．テュルク文にのみ現存するクビライの逝去を示す表現［語註 M1 参照］も，おそらく翻訳に際しての創作・増広ではなく，本来のモンゴル語原典には存在したものと思われる．

あるいは，ティムール朝には『列聖制詔』や『世祖聖訓』のウイグル文字テュルク語訳本が伝存しており，そこから一節を抜粋し，いったんウイグル文字モンゴル文に還元・再構した上で，さらにパクパ文字に翻字した ――ただし浄書の際にはパクパ文字モンゴル文・ウイグル文字テュルク文の順に配された―― ものが，我々の「クビライ遺訓」なのかもしれない．モンゴル文中の不自然な表現・構文やテュルク文との異同も，テュルク語を母語とするティムール朝王族が不慣れなモンゴル語に翻訳してパクパ文字で書写したための誤記・誤脱と説明できる．これはあくまで臆測にとどまるものの，可能性として念頭に置くべきであろう．

4. おわりに

以上，本稿では，イスタンブル大学図書館所蔵『驚異の雑纂』所収のパクパ文字モンゴル語・ウイグル文字テュルク語「クビライ遺訓」について，これを大元ウルス官撰のモンゴル語書籍からティムール朝王族が抜粋したものとみなす宮紀子の新提案に導かれ，また Ölmez/Vovin 新提供のカラー写真複製をも参照利用しつつ，あらためて文献学的に比較検討し，従来の不明語のいくつかを改めた．その結果，パクパ文字モンゴル文の淵源には現在は知られないウイグル文字モンゴル語のテキストを想定できること，また現存の「クビライ遺訓」のパクパ文字モンゴル文が直にウイグル文字テュルク文へ翻訳されたとはみなし得ないことを論じた．

「クビライ遺訓」の成書過程やその原典について，さらに断定的な考証を提示することは，目下の史料状況では困難に思われる．とはいえ，さきに拙稿［松井 2018a］でも論じたように，ウイグル文字使用はティムール朝の「モンゴル後継国家」としての性格に直接に関わる問題でもある．また，パクパ文字を制定したクビライ本人の「遺訓」がティムール朝期のパクパ文字モンゴル語資料として確認されたことは，ティムール朝のパクパ文字使用に関するイブン=アラブシャーの簡潔な記事を補うとともに，ティムール朝によるモンゴル帝国の文字文化伝統の継受という側面に光を当てるものでもある．今後，ポスト=モンゴル期の西方ユーラシアに由来するウイグル文字・パクパ文字資料がさらに見出され，その歴史学的検討が進展することを期待したい．

---

(17) この点，「クビライ遺訓」の挿図キャプションで「パスパ（ママ）字モンゴル文に続きウイグル文字トルコ語訳が記され」るとした拙稿の説明［松井 2001, 37］もあわせて訂正したい．

略号・参考文献（ABC 順）

AM/Sanders = Ahmed ibn Arabshah, *Tamerlane or Timur the Great Amir*. Tr. by J. H. Sanders. London, 1936.

Bosson, James Evert 1961 : A Rediscovered Xylograph Fragment from the Mongolian ’Phags-pa Version of the *Subhāṣitaratnanidhi*. *Central Asiatic Journal* 6-2, 85–102.

BT XVI = Dalantai Cerensodnom / Mafred Taube, *Die Mongolica der Berliner Turfansammlung* (*Berliner Turfantexte* XVI). Berlin, 1993.

Cleaves, Francis Woodman 1949 : The Sino-Mongolian Inscription of 1362 in Memory of Prince Hindu. HJAS 12-1/2, 1–133.

Cleaves, Francis Woodman 1950 : The Sino-Mongolian Inscription of 1335 in Memory of Chang Ying-jui. HJAS 13-1/2, 1–131.

Cleaves, Francis Woodman 1953 : The Anonymous Scribal Note Pertaining to the *bičig* of Ötemiš. HJAS 16-3/4, 478–486.

DMBS = 彭金章・王建軍・敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟北區石窟』全 3 巻．文物出版社, 2000–2004.

Doerfer, Gerhardt 1975 : Mongolica aus Ardabīl. *Zentralasiatische Studien* 9, 187–263.

ED = Gerard Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth Century Turkish*. Oxford, 1972.

Franke, Herbert 1962 : Zur Datierung der mongolischen Schreiben aus Turfan. *Oriens* 15, 399–410.

HJAS = *Harvard Journal of Asiatic Studies*

呼格吉勒圖（Kögǰiltü）・薩如拉（Sarula）2004 :『八思巴字蒙古語文獻匯編』内蒙古教育出版社.

HYYY/Beijing =『華夷譯語・高昌館課・回回館雜字・譯語・百譯館譯語・暹羅館譯語・八館館考』（北京圖書館古籍珎本叢刊 6）書目文獻出版社, n.d.

Жанчив 2002 : *Дөрвөлжин үсгийн монгол дүрсгал*. Улаанбаатар.

照那斯圖 (Junast) 1991 :『八思巴字和蒙古語文獻Ⅰ：文獻匯集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Kaçalın, Mustafa 1997 : Hüseyinoğlu Hasan’ın dört dilli sözlüğü: *Şamilü’l-Luğa*. *Türk Dilleri Araştırmaları* 7, 55–122.

Kara György. 1976 : Petites inscriptions ouigoures de Touen-houang. In: G. Kaldy-Nagy (ed.), *Hungaro-Turcica*, Budapest, 55–59.

栗林均 2003 :『『華夷訳語』甲種モンゴル語全単語・語尾索引』東北大学東北アジア研究センター.

栗林均 2009 :『『元朝秘史』モンゴル語漢字音訳・傍訳漢語対照語彙』東北大学東北アジア研究センター.

栗林均・松川節 2016 :『『西藏歴史檔案薈粋』所収パスパ文字文書』東北大学東北アジア研究センター.

Lessing = Ferdinand D. Lessing, *Mongolian-English Dictionary* (3. rep.). Bloomington, 1995.

Ligeti, Louis 1962 : Un vocabulaire mongol d’Istanbul. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 14, 3–99.

Ligeti, Louis 1972 : *Monuments en écriture ’phags-pa*. Budapest, 123.

MA/Poppe = Николай Поппе, *Монгольский словарь Мукаддимат ал-адаб*. Москва/Ленинград, 1938–1939 (Rpt. Farnborough, 1971).

間野英二 1998 :『バーブル・ナーマの研究Ⅲ：訳註』松香堂.

松井太 2001 :「パスパ字の制定」『月刊しにか』2001-11, 34–37.

松井太 2016 :「大英図書館所蔵対訳語彙集断片 Or. 12380/3948 再考」『東方学』132, 87–74.

松井太 2017 :「敦煌石窟ウイグル語・モンゴル語題記銘文集成」松井太・荒川慎太郎（編）『敦煌石窟多言語資料集成』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所，1–161.

松井太 2018a :「モンゴル命令文とウイグル文書文化」『待兼山論叢』史学篇 52, 1–27.

松井太 2018b :（王平先：譯）「楡林窟第 16 窟叙利亞字回鶻文景教徒題記」『敦煌研究』2018-2, 34–39.

松井太 2020 :（批評）「宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』を読む（二）」『内陸アジア言語の研究』35, 53–111.

松井太 2021 :（批評）「宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』を読む（三）」『内陸アジア言語の研究』36, 69–118.

松川節 1995 :（批評・紹介）BT XVI.『東洋史研究』54-1, 105–122.

Меліоранскій, Платон 1904 : Арабъ филологъ о монгольскомъ языкѣ. *Записки Восточнаго Отдѣленія Императорскаго Русскаго Археологическаго Общества* 15 [1902–1903], 75–112.

宮紀子 2006 :『モンゴル時代の出版文化』名古屋大学出版会.
宮紀子 2008 :「『農桑輯要』からみた大元ウルスの勧農政策（下）」『人文学報』96, 101–125.
宮紀子 2018 :『モンゴル時代の「知」の東西』上・下．名古屋大学出版会.
宮紀子 2020 :「諫早庸一「書評 宮紀子『モンゴル時代の知の東西』」に対する疑義」『史苑』80-1, 131–148.
宮紀子 2021 :「モンゴル時代史鶏肋抄(5)：モンゴルの文字の来し方・行く末」『ミネルヴァ通信「究」』128, 40–43.
MNT/Rachewiltz = Igor de Rachewiltz, *The Secret History of the Mongols: A Mongolian Epic Chronicle of the Thirteenth Century*, 3 vols. Leiden/Boston, 2004–2013.
村上正二 1970 :（訳註）『モンゴル秘史（一）』平凡社.
村岡倫 2006 :「モンゴル帝国の真実」天野哲也・臼杵勲・菊地俊彦（編）『北方世界の交流と変容』山川出版社，134–155.
Ölmez, Mehmet / Vovin, Alexander 2018 : Istanbul Fragment in ’Phags-pa and Old Uyghur Script Revisited. *Journal Asiatique* 306-1, 147–155.
小澤重男 1986 :『元朝秘史全釈（下）』風間書房.
小澤重男 1987 :『元朝秘史全釈続攷（上）』風間書房.
PTMD = Völker Rybatzki, *Die Personennamen und Title der mittelmongolischen Dokumente*. Helsinki, 2006.
Ramstedt, Gustav Johan 1909 : Mongolische Briefe aus Idiqut-Schähri bei Turfan. *Sitzungsberichte der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften* 1909-1, 838–848
RH = Peter B. Golden (ed.), *The King’s Dictionary: the Rasūlid Hexaglot*. Leiden/London, 2000.
Saito Yoshio 2013 : The Mongolian Words in the Quadrilingual Vocabulary Preserved in the Topkapı Palace Museum Library. In: Kim Juwon/Ko Dongho (eds.), *Current Trends in Altaic Linguistics*, Seoul, 305–338.
Sertkaya, Osman Fikri 1977 : *İslâmî devrenin Uygur harfli eserlerine toplu bir bakış*. Bochum.
Sertkaya, Osman Fikri 1981 : Timürlü Şeceresi (Topkapı Sarayı Müzesi, Hazine 2152 v. 32–43). *Sanat Tarihi Yıllığı* 9/10, 241–258.
Sertkaya, Osman Fikri 2006 : Kubilay Han’ın vasiyeti. In: S. Rifat (ed.), *Cengiz Han ve mirasçıları: Büyük Moğol İmparatorluğu*. İstanbul.
Shahgoli, Nasser Khaze 2017 : Uygur yazısı ile ilgili bir belge. *Modern Türklük Araştırmaları Dergisi* 14-3, 153–190.
ŠP = Anonym, *Šu‘ab-i Panğğāna*. MS. İstanbul, Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Ahmet 2937.
Төмөртогоо 2002a : *Монгол дөрвөлжин үсэгийн дурасхалын судалгаа*, Улаанбаатар.
Төмөртогоо 2002b : *Араб үсэгийн монгол дурасхалын судалгаа*, Улаанбаатар.
Tömörtogoo 2022 : *Moğolcanın ’Phags-pa yazısıyla yazılmış eserleri*. Ankara.
Tumurtogoo 2010 : *Mongolian Monuments in ’Phags-pa Script*. Taipei, 115–116.
Tuna, Osman Nadim / Bosson, James Evert 1962 : A Mongolian ’Phags-pa Text and Its Turkish Translation in the *Collection of Curiosities*. *Journal de la Société finno-ougrienne* 63-3, 3–16.
牛根靖裕ほか 2021 :「コズロフ蒐集ハラホト出土モンゴル語印刷文献断簡 G110r について」『日本モンゴル学会紀要』51, 41–63.

付記　本稿は JSPS 科研費 JP20H01324 による研究成果の一部である.